

Gangaramaya temple (Buddhism) in Columbo, Sri Lanka: 2024.May

第二次世界大戦後の日本を分割占領から救った、スリランカ代表の「愛」の演説

ネパールには10回訪問したが、スリランカは41年前に協力隊ネパールの帰りに観光で訪れて以来、2回目。日本語学校訪問の約束が2時間半遅くなり、運よくガンガラマヤ寺院を訪れることとなった。とても感動した寺院訪問となった。

今回、スリランカ訪問前にスリランカと日本の関係の歴史から、戦後の日本を分割統治から救うことになったスリランカ首相のサンフランシスコ講和条約の演説を知った。それは仏陀の教えに基づく愛の演説であった。

コロombo市内のホテルからの眺め



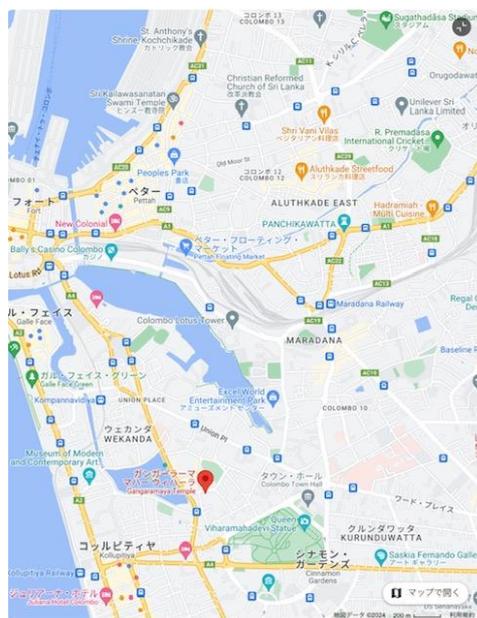
スリランカは、仏教徒のシンハリ族が8割ほどを占め、他にタメル族のヒンズー教徒が10%以上、その他イスラム教徒、キリスト教徒がいる。

仏教寺院を訪れると敬虔な仏教徒が多いことに圧倒された。日本の戦後分割統治の危機は仏陀の教えに救われたのだと、そしてアジア諸国が欧米列強の植民地支配から逃れたい、日本のように独立して欧米に負けない国になりたい、という気持ちが日本を

助けてくれたのだと思った。

スリランカは、国として数年前までデフォルト（経済破綻）状態であったが、今はそれほど問題ないようだ。コロンボ市内は道路も広くきれいに区画されていて、美しい街に見えた。ネパールより給与水準も 1.5 倍以上で豊かに見えた。

社会主義国ということか、公立の病院での治療は無料、公立の学校は大学まで無料、ということでデフォルトの国なのに驚いた。コロンボの日本語学校では日本に留学希望者が多いが、南部の地方の日本語学校を訪れると、日本で働きたい希望者ばかりでその違いに驚かされた。まだまだ地方の田舎では稼げる仕事がないのだと感じた。



コロンボ市内の地図：Gangaramaya temple

対日賠償請求権の放棄 J.R.Jayawardane ：在スリランカ日本大使館 HP より

故ジャヤワルダナ元大統領は、1951年のサンフランシスコ講和会議にセイロン代表（当時蔵相）として出席し、「憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む（hatred ceases not by hatred, but by love）」という仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求権の放棄を明らかにするとともに、わが国を国際社会の一員として受け入れるよう訴える演説を行いました。この演説は、当時わが国に対し厳しい制裁処置を求めていた一部の戦勝国をも動かしたとも言われ、その後のわが国の国際社会復帰への道につながるひとつの象徴的出来事として記憶されています。

Gangaramaya temple : ガンガラマヤ仏教寺院





ガンガラーマ寺院

市内で最も訪問者の多い寺院であるガンガラーマ寺院は、スリランカ最大で最も華やかなヴェサック祭りを毎年開催しており、120年の歴史があります。1885年、植民地支配下にあり仏教と文化の復興が切望されていた時期に、設立されました。

スリランカ、タイ、インド、中国の建築的特徴を取り入れた、精巧に作られた建物です。豊富な寺院内の仏像は、アジア各国の仏像を集めたものです。日本からの仏像もあります。

貴重なコレクションの中で最も貴重なものは仏陀の髪の毛の房であると言われています。Gangga Lama Temple は、コロンボで非常に有名なチベット仏教寺院です。



紅茶大国スリランカと日本の特別な関係

1951年、サンフランシスコ講和会議。公式には1945年に終わった第2次世界大戦でしたが、その後、ソ連の台頭、中国の分割等があって混乱が続き、アジアの戦後秩序形成は、このサンフランシスコ講和会議が最大の機会と見なされていました。

当時、日本政府は戦勝国からの巨額賠償金請求や米・英・ソ・中に依る4分割統治プラン等に脅えていました。「青森から函館に渡るのにビザが必要になるかも知れない」。ところが、会議の冒頭、演壇に立った（当時）セイロン代表J.R.ジャヤワルダナ氏の演説で、会議の雰囲気が一変し、敗戦国日本を穏便に扱い、平和で力強い「仲間」にしようということになったのです。



J.R.ジャヤワルダナ氏の演説

1951年9月4日（サンフランシスコ講和会議）

調印式での吉田 茂 全権代表

9月8日、吉田茂主席代表は講和条約に署名し、翌1952年4月28日、国会で批准された結果、第二次世界大戦（太平洋戦争）は終了したのです。日本を救った「ジャヤワルダナ演説」の抄訳を示します。

「私は東京を経由してサンフランシスコに来ました。東京で敗戦後の辛く苦しい民衆の生活を見ました。彼等は規則を守り、貧しいながらも毎日団結して希望に向かって努力していました。彼等の性は善であることを理解すべきです。

我が国も大戦中、被害を受けなかった訳ではありませんが、私は日本に対して我が国が有する損害賠償請求権をここに放棄することを表明します。

仏陀が言われたように、憎しみに対して憎しみを返せば戦いは終らないものです。憎しみに対し、私達は愛と寛容を持つべきであります」。

殆どどの日本人はこんな演説の存在など知りません。なにしろ昭和 26 年のことです。TV もない、ラジオだって全家庭で聴けた訳ではありません。日本政府はアメリカに対応するのに精一杯で、当時の新聞にも目立った記事は掲載されなかったようです。

つまり、日本人はその事実を知らずにひとつの演説によって助けられたのです（勿論、外交は複雑なので、その他のファクターも在ったことは、少し調べれば分かります）。J.R.ジャヤワルダナ氏とスリランカ国民に感謝の意を表します。

2014 年 9 月、当時の安倍晋三首相はスリランカを訪問し、国会議事堂で J.R.ジャヤワルダナ元首相とスリランカ国民に感謝の意を表す演説をしました。



○日本を分割占領から救った、スリランカ代表の「愛」の演説： HP より
1951 年に開かれた、日本の運命を左右する「サンフランシスコ講和会議」。その席上、日本を分割占領から救ってくれたのが、当時スリランカ代表を務めていたジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ氏でした。なぜスリランカは日本を擁護してくれたのでしょうか。

○日本とスリランカの間には、互いに助け合った長い友好の歴史がある
1951（昭和 26）年 9 月 6 日午前 11 時、スリランカ代表の J・R・ジャヤワルダナの演説が始まった。舞台は米国サンフランシスコ講和会議である。
51 カ国からの代表が集まって、日本との講和条約を結び、日本の独立を認めるかどうか

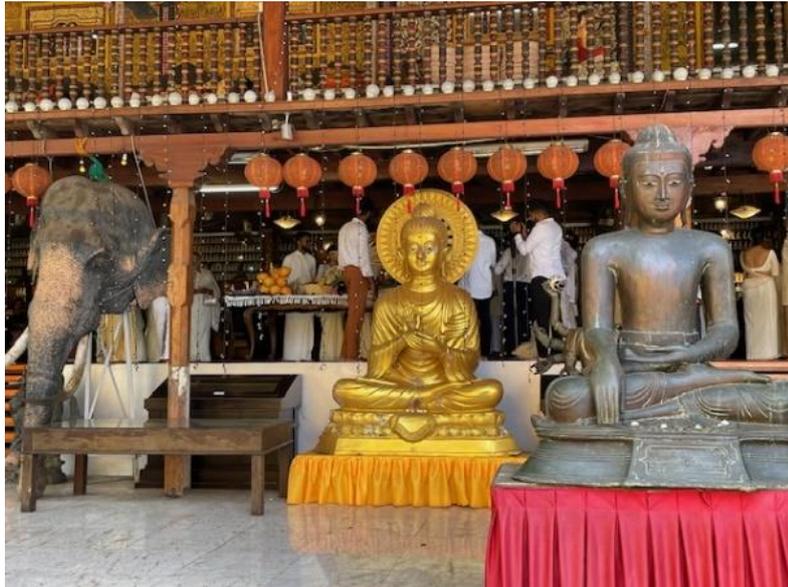
かを議論する場であった。米国が中心となって、日本の独立を認める講和条約案がまとめられていたが、ソ連は日本の主権を制限する対案を提出し、さらに中国共産党の出席を求めたりして、審議引き延ばしを図っていた。

ジャヤワルダナ代表は、自らはスリランカ代表ではあるが、「日本の将来に対するアジアの人々の全般的態度における彼らの感情をも述べうる」として、こう語った。

「アジアの諸国、セイロン（注:スリランカ）、インド及びパキスタンの日本に対する態度を活気づけた主要な理念は日本は自由であるべきであるということです。」

「自由であるべき」とは、日本の占領を解いて、独立を回復させるべき、という意味である。





○「アジア隷従人民が日本に対して抱いていた高い尊敬のため」

講和条約への賛成を表明した後、ジャヤワルダナ代表はその理由を述べた。

「アジアの諸国民が日本は自由でなければならないということに関心をもっているのは何故でありましょうか。それは日本とわれわれの長年の関係のためであり、そしてまた、アジアの諸国民の中で日本だけが強力で自由であり日本を保護者にして盟友として見上げていた時に、アジア隷従人民が日本に対して抱いていた高い尊敬のためであります。」

「共栄のスローガン」とは、日本が大戦中に唱えた「大東亜共栄圏」のことであり、実際に欧米諸国の植民地支配からの独立を目指す国々の代表が東京に集まって、「大東亜会議」が開催されている。

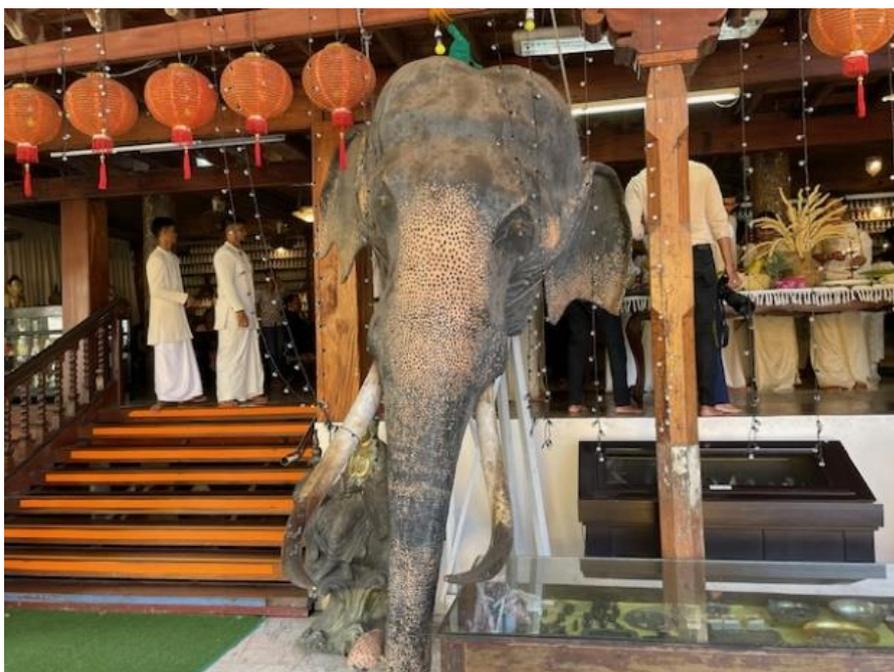
さらにビルマ、インド、インドネシアでは、日本が支援して設立された独立軍が、これらの国々の独立戦争に大きな役割を果たした。

ジャヤワルダナ代表は、日本に対する賠償請求権を放棄する、と続け、その理由として、仏陀の「憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ愛によってのみ消え去るものである」を引いた。

ジャヤワルダナの演説が終わると、賞賛の声の嵐で会場の窓のガラスが割れるほどであったと『サンフランシスコ・ニュース』は報じている。また『サンフランシスコ・エグザミネー』紙は「褐色のハンサムな外交官が、セイロン島よりやって来て、世に

忘れ去られようとしていた国家間の礼節と寛容を声高く説き、鋭い理論でソ連の策略を打ち破った」と評した。

この後、ソ連、ポーランド、チェコスロバキアを除く 49 カ国が講和条約に署名し、翌年 4 月 28 日、日本はついに独立を回復したのだった。





○西洋の植民地支配 400 年

おそらく当時の日本国民は、遠く離れたスリランカの一外交官がなぜにこれほどまで日本を擁護してくれるのか、いぶかしく思ったろう。しかし、スリランカの歴史を辿ってみれば、その理由も見えてくる。

スリランカとは「光り輝く島」という意味で、その美しい豊かな自然から「インド洋の真珠」とも呼ばれてきた。北海道の8割ほどの国土に、現在では2,000万人の人々が住んでいる。

紀元前5世紀に北インドから移住したシンハラ人が王国を作り、紀元前3世紀に仏教が伝わると、それ以降、現在まで仏教国として信仰を守ってきた。

しかし、スリランカはインド洋交易の重要拠点であり、そのため、早くから西洋諸国の侵略にさらされた。1505年にポルトガル人がやってきて、約150年間、沿岸部を支配した。1658年からは今度はオランダが替わって約140年間、植民地支配を続けた。さらに1796年にはイギリスが支配者となり、全島を支配下においた。

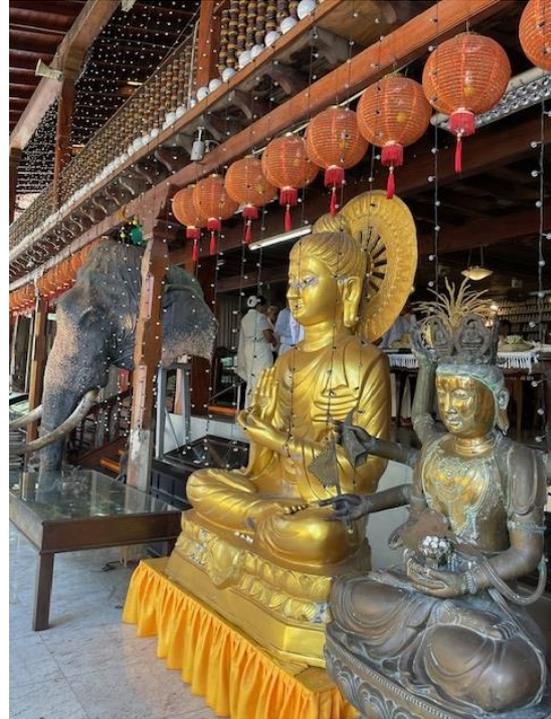
イギリスは、スリランカ全島を紅茶の生産基地とし、米まで輸入しなければならない状態にしてしまった。独立を求めて大規模な反乱が3度起きたが、いずれも武力鎮圧された。

イギリスは南インドから移住してきた少数派のタミル人を優遇し、彼等を教育して役人とし、多数派のシンハラ人を治めさせた。この巧妙な分割統治が、現在も続く民族闘争の原因となった。

同時にキリスト教徒を優遇し、仏教を抑圧した。シンハラ人のほとんどは仏教徒で、教育を受けることも難しかった。

私は、アジアに対する共栄のスローガンが隷従人民に魅力のあったこと、そしてビルマ、インド及びインドネシアの指導者のあるものがかくすることにより彼等の愛する国々が解放されるかも知れないという希望によって日本人と同調したという前大戦中に起こった出来事を思い出すことができます。





○「次に生まれるときには日本に生まれたい」

3度の来日で、日本の驚異的な発展を目の当たりにしたダルマパーラは、シンハラ人の自立のためには技術教育が欠かせないと考え、日本に留学生を派遣する財団を設立した。

大正3（1913）年、ダルマパーラは最後の訪日を行い、帰路、満洲と朝鮮も訪れた。日本はこれらの地に惜しみない資本投下を行って、急速に近代化を進めていた。ダルマパーラは「日本が2、3年の内にこの地で完成させたことを、イギリスがインドで行ったならば優に50年を要していただろう」と、植民地を搾取の対象としかみないイギリスとの違いを指摘した。

ダルマパーラの活動によって、仏教に根ざしたシンハラ人の民族主義運動が高まっていった。イギリスの植民地当局はこれを警戒し、おりから発生した暴動の首謀者としてインドで5年間もダルマパーラを拘束した。弟も捕らえられ、半年後に獄死した。それでもダルマパーラは運動をやめず、昭和8（1933）年、69歳でスリランカ独立の日を見ることなく、生涯を終えた。「次に生まれるときには日本に生まれたい」とよく話していたという。



○皇太子のお召し艦を一目見ようと胸を弾ませて港に赴いた少年
1921（大正10）年3月、日本の巡洋艦「香取」がスリランカを訪れた。当時、皇太子であった昭和天皇をお乗せして、ヨーロッパに向かう途上であった。
皇太子のお召し艦を一目見ようと港に集まった人々の中に、1人の少年がいた。15歳のジャヤワルダナであった。
ジャヤワルダナは、昭和54（1979）年、国賓として来日した際に、宮中の歓迎晩餐会にて次のように語っている。

「外国の統治の下では、人々の信仰や言葉、慣習などはほとんど消え去りそうになっていました。

このことから、私達だけではなく、西欧の帝国主義の下で同じような運命によって苦しんでいる全てのアジアの国民達は日本を称賛し、尊敬していたのです。先の80年の間、日本はアジアにおいて独立国として立ち上がっていたのです。

西欧の列強が、その軍事力と貿易力によって世界を支配していた時に、あなた達は彼等と競い、匹敵し、時には打ち負かしていました。

陛下が1920年代に皇太子としてスリランカを訪れた際には、私は気持ちを高ぶらせて陛下が乗船されている艦を一目見ようと港に行ったものでした。」



当時の日本は、日英同盟のもと、第1次大戦をイギリスと共に戦って勝利し、世界の強国として頭角を現しつつあった。自分たちと同じアジア民族で、かつ共に仏教を信奉する日本の皇太子が、自国の巡洋艦で対等の同盟国であるイギリスに赴くという出来事は、「自分たちもいつかは独立を」という希望をスリランカの人々に抱かせたに違いない。





○インドとスリランカにいる兄弟・姉妹に呼びかけます」

1932（昭和7）年にコロomboに生まれ、スリランカ独立後に海軍兵学校部隊長となったソマシリ・デヴェンドラ氏は、次のように語っている。

「1941年に日本が真珠湾を攻撃し、第2次大戦に参戦した時には、スリランカ人は日本に対してある種の同情を寄せていました。

1942年の初め、強力な日本海軍はインド洋上の敵艦をどんどんと破壊していき、スリランカ島に向かっていきました。しかし、その時にスリランカに停泊していたイギリス軍艦の多くは第1次世界大戦時代に造られた古いものばかりでした。

4月、日本海軍の航空隊はスリランカの都市を空襲し、それらの軍艦に攻撃をしかけてきました。この航空隊は真珠湾攻撃に参加した後にやって来た隊でした。日本軍の爆撃の命中率は世界で最も正確だったと言われています。」

この空襲の際に、3人が乗った日本軍の攻撃機1機が墜落した。コロomboのカテッナ市営墓地には、墜落死した日本兵の墓が造られている。

日本軍はシンガポールを占領した後、投降したインド兵を集めて、インドの独立を目指すインド国民軍を組織させた。その中にはスリランカ人の部隊もあった。

インド国民軍はシンガポールからインドやスリランカに向かって「ラジオ昭南（シンガポール）」と呼ばれるラジオ放送を行った。当時12歳だったデヴェンドラ氏は、こ

のラジオ放送をよく聞いていた。「こちらはラジオ昭南、インドとスリランカにいる兄弟・姉妹に呼びかけます」という言葉で始まり、「ワン・デイ・マータラ」という、今でもインドでよく知られているインド国民軍の歌を流した。

アメリカの情報機関は、このようなインド向けの放送が、インド人の心理に与えた影響は非常に大きかったとしている。





○「私達は日本に、このことを感謝しなければなりません」

日本が敗戦した日は「Victory over Japan Day (対日勝利の日)」と呼ばれ、大きな都市では記念式典が開かれた。デヴェンドラ氏が住んでいたラトゥナプラでも式典が開かれ、イギリス側代表の後で、氏の父親がスリランカ側を代表して演説を行った。

「この日は、私達が日本に対する勝利を祝うものです。しかし、私達は日本によって得られたものがあります。それは愛国心という心でした。それは、日本によって全てのアジアの国々にもたらされたのでした。

戦争によってアジアの国々、インドネシアやインド、スリランカ、ビルマなどは自らに対する自信と民族主義の意識を得たのです。私達は日本に、このことを感謝しなければなりません。」



「対日勝利の日」に、英国側の前で、日本に感謝する演説を行うとは、まことに大胆な言動である。それだけ強い気持ちが籠もっていたのだろう。

1948年2月4日、スリランカは独立を果たした。日本が設立を支援したインド国民軍の指導者たちをイギリスが「反逆者」として軍事裁判にかけようとした事に対して、インド全土に暴動、ストライキが広まり、それがきっかけとなってインドは独立を勝ち得た。それとともに、イギリスはスリランカからも撤退したのである。

昭和天皇のお召し艦を一目見ようと港に駆けつけた少年ジャヤワルダナが、独立政府の要職についていた。そしてサンフランシスコ講和会議で日本を擁護する演説をすることになる。

日本は明治以降、スリランカの人々の独立への希望に灯を点してきたのだが、今度はそのスリランカが日本の独立を助けてくれたのである。



























